京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第二卷　第一號

論說

◉收益遞減法則ノ發見及ビ改造　法學博士　河上肇

◉米價ノ騰落ト其調節ニ就テ(二、完)　法學博士　戸田海市

研究

◉近代都市ノ土地買收政策　法學博士　神戸正雄

◉穀倉證券論　助教授　河田嗣郎

◉本邦出生率增加ノ原因(一)　講師　高田保馬

◉本多利明ノ經濟說(一)　法學士　本庄榮治郎

雜錄

◉經濟雜話(一)　法學博士　田島錦治

◉米國ノ經濟的繁榮　法學博士　神戸正雄

◉戰爭利得稅新法　法學博士　小川鄉太郎

◉米歐爲替ト貿易　助教授　河田嗣郎

◉諸學校學生入學年齡ニ關スル統計　醫學博士　鈴木文太郎

◉最近本邦鑛業ノ發達ニ就テ　工學博士　齋藤大吉

◉最近ノ金融問題(二、完)　谷村一太郎

◉萊府大學ノ經濟演習　ドクトル　西彥太郎

◉米國ニ於ケル外來白人ノ母語　法學博士　河上肇

經濟論叢　第二卷　第一號（通卷第七號）

論說

收益遞減法則ノ發見及ビ改造

法學博士　河上肇

一、法則ノ發見(上)—うえすと　三、法則ノ改造(上)—せにをあ
二、法則ノ發見(下)—まるさす　四、法則ノ改造(下)—ふをんてゅーれん

收益遞減ノ法則ハ最初動的法則トシテ唱ヘ出サレタモノデアル。其ガ後ニハ靜的法則ニ改造サレ、更ニ又、啻ニ土地ニノミナラズ資本及ビ勞働ニモ適用セラルルノ法則ト認メラルルコトトナリ、カクテ元ハ唯地代ヲ說明スル爲ニノミ用ヒラレタ此法則ガ、今日ニテハ更ニ利子及ビ勞賃ノ決定ノ理ヲ說明スルノ一學說タル限界生產力說ヲ派生スルコトト爲ツタ。今本篇ノ目的ハ此法則ノ發見及ビ如上ノ改造ニ、就キ其代表的學者ト認ム可キ者ヲ論定セントスルニ在ル。

一、法則ノ發見(上)——うえすと

收益遞減ノ事實ヲバ一ノ法則トシテ記述シタルモノハ、今ヲ距ル正ニ一百年前卽チ一八一五年ニ英人さー・えどわーど・うえすとノ公ニシタル小冊子ヲ以テ恐ク嚆矢トスベキデ有ラウ。此書ハおくすふぉーど大學一學僚テフ匿名ノ下ニ出版サレタル著書ニシテ、其標題ノ全文ハ次ノ如クデアル。

Essay on the Application of Capital to Land, with observations shewing the impolicy of any great restriction of the importation of corn, and that the bounty of 1688 did not lower the price of it.

(註)さー・えどわーど・うえすとハ一七八二年英國 Middlesex 州ノ St. Marylebone ニ生ル。Harrow 及ビ Oxford ニテ教育ヲ受ケ、一八〇四年ニハばちえろあノ稱號ヲ、一八〇七年ニハますたーノ稱號ヲ得テ爾來おくすふーど大學ノ學僚タリ。初メ辯護士ノ職ニ從ヒ、一八一五年ニハ茲ニ述ベシ Essay on the Application of Capital to Land ヲ著シ、一八二七年ニハ A Treatise of the Law and Practice of Extents in Chief and in Aid ヲ著ス。後辯護士ノ職ヲ罷メ、印度ニ赴任シテぼむべいノ裁判官ト爲リ、一八二二年ニハ準男爵ト爲リ、一八二八年在官中齡五十二滿タズシテ死ス。

彼ハおくすふぉーどヲ去リテ後モ死ニ至ルマデ常ニ經濟學ニ就イテ多少ノ注意ヲ拂ヒ居タリシトノ事ナレドモ(一八二六年ニハ Price of Corn and Wages of Labour. ヲ著ス)兎モ角其ハ彼ニトツテ一ノ內職的ノ仕事テアツタ。ソレ故先ニ掲ゲシ小册子ヲ公ニスルニ當ツテモ、本職ノ妨ゲニ爲ツテハト云フ友人ノ忠告ニ從フテ、匿名ニシテ置イタト云フ話デアル。

コノうえすとハきゃなんノ評語ニ從ヘバ the first, though not the name-father, and greatest of the Ricardian School * ト云フホドノ地位ヲ占メテ居ル學者デアルガ、世間カラハ殆ド全ク忘レラレタ人デ、只りかーどーノ原論ノ序文ノ中ニ

In 1815, Mr. Malthus, in his "Inquiry into the Nature and Progress of Rent," and a Fellow of University College, Oxford, in his "Essay on the Application of Capital to Land," presented to the world, nearly at the same moment, the true doctrine of rent.....

ト云フ文句ガアルノデ、纔ニ a fellow of University College, Oxford. ノ名ニ依りりかーどー地代説ノ先驅者トシテ知ラレテ居タ位ノコトデアル。併シ今日デハじょんすーぱぷきんす大學ノぱらんだー教授ガ之ヲ Reprint of Economic Tracts (一九〇三年出版)中ノ一册ニ收メタガ爲ニ容易ニ其著書ヲ見ルコトガ出來ルノデアル。猶此れぷりんとノ卷頭ニハ編者ノ筆ニ成レル序ガアツテ、うえすとノ傳記モ其中ニ述ベテアル。

うえすと前掲書ノ卷頭ニハ左ノ如ク述ベテアル。

『此論文ノ主タル目的ハ經濟學ニ於ケル一原則ヲ公ニスルニ在ル。其原則ト謂フハ、數年前余ノ考ヘ付キタルモノニテ、此原則ヲ藉ラザレバ到底説明シ難キ斯學ノ難問ノ多クノモノヲ解釋スルニ足ルト思ハルルモノデアル。

.....其原則トハ只コウ云フコトデアル、耕作ガ段々擴張サルルニ從ツテ (in the progress of improvement of cultivation)農產物ノ產出ハ次第ニ多クノ費用ヲ要スルコトニ爲ルト云フコト、換言スレバ、土地ノ純生產物ノ總生產物ニ對スル比例ハ引續キ減少シツツアルト云フコト、即チ是レデアル。

茲ニ總生產物ト謂フハ、言フマデモナク、生產ノ費用トハ何等ノ交涉ナキ全生產物ノ意味デアリ、純

* Cannan, Production and Distribution, p. 279.

生產物ト謂フハ、其總生產物ヨリ生產ノ費用ヲ控除シテ殘レル所ノ物デアル。』(1)

然ラバ如何ナル理由ニ依ツテ斯カル法則ガ行ハルルカト云フニ、

『土地ノ上ニ加ヘラルベク增加サレタル勞働(work)ハ、新タナル土地ヲ耕作スル爲ニ費サルルカ、又ハ既ニ耕作サレ居ル土地ヲ一層深ク耕作スル爲ニ費サルルモノデアル。』(2)

然ルニ

『耕作スル土地ヲ殖スコトニスル爲ニハ、ドウシテモ劣等ノ土地ヲ新タニ耕スコトニ爲ル。ソウシテ此場合ニハ、新タニ施シタ勞働(work)ニ對スル報酬(return)ハ、勿論以前ノモノニ比シテ少イ譯デアル。』(3)

之ト同時ニ

『社會ノ進歩ニ伴ヒ新タナル土地ガ耕作サレルコトニ爲ルト云フ事ソレ自身ガ同ジ土地ノ上ニ次第ニ勞働(work)ヲ加ヘテ行クト、以前ト同ジダケノ利益(advantage)ハ得ラレヌモノデアルト云フコトヲ說明シテ居ル譯デアル。』(4)

以上引用セシ所ニ依ツテ明カナルガ如ク、うえすとノ意見ニ依レバ、土地ノ產物ヲ增加スルガ爲ニハ、新タニ劣等ナル土地ヲ耕作スルカ、又ハ舊來ノ耕地ヲ一層集約的ニ耕作スルカノ二法ニ依ルノ外ハ無イガ、前ノ方法ニ依レバ無論生產費ヲ增加シ、又後ノ方法ニ依ルモ等ク生產費ノ增加ヲ免レザルコトハ、舊來ノ耕地ガ集約的ニ耕作サルルニ伴フテ、劣等ナル土地ガ新タニ耕作セラルルニ至ルノ事實ニ徵シテ明カデアルカラ、要スルニ土地ノ產物ヲ增加スルガ爲ニハ次第ニ其生產費ヲ

(1) pp. 1, 2.
(2) p. 9.
(3) p. 10.
(4) p. 10.

増加スルノ必要ガアルト云フノデアル。

コレダケノ範圍ニ於イテハ、氏ノ此法則ニ關スル説明ハ、今日普通ノ經濟學教科書ニ在ル説明ト殆ド同ジヤウニ見ヘル。乍併、茲ニ注意スルノ必要アルハ、氏ハ此法則ヲ以テ一ノ動的法則ト看做シ、且此法則ノ作用ヲ以テ、機械及ビ企業ノ應用ニ基ク生産力ノ増加ヲ相殺シテ餘リアリト看做シテ居タト云フコトデアル。例ヘバ其議論ノ一節ニ曰ク

『分業及ビ機械ノ應用ハ、工業ニ於ケル勞働ヲバ益々生産的ナラシメル。又同ジ原因ハ、農業ニ於ケル勞働ヲバ益々生産的ナラシメル。併シ他ノ原因(即チ既ニ耕作サレ居ル土地ヨリモ劣等ナル土地ヲ耕作スル必要、又ハ同ジ土地ヲバヨリ多クノ費用ヲ以テ耕作スルノ必要ハ、農業ニ於ケル勞働ノ生産力ヲバ、社會ノ發達ニ伴ヒ益々減少セシムルノ傾向ヲ有スル。(茲ニハ tend ト云フ字ガいたりつくデ使ッテアル。之ガ此語ノ斯學上特種ノ意味ニ於イテ用ヒラレタ最初デアル。トハきやなんノ説(1)デアル)。而シテ此ノ後ノ原因ハ、農業ニ於ケル機械及ビ分業ノ效果ヲ相殺シテ餘リアルモノデアル。』(2)

即チ氏ノ説ニ依レバ、技術ノ進歩ハ地力ノ遞減ヲ償フニ足ラズト云フノデアル。然ラバ更ニ一歩ヲ進メテ何故爾カ云フヤト云フニ、氏ハ歴史的ノ事實ヨリ直接ニ之ヲ歸納スルコトナク、却テ利潤ガ次第ニ下落シツツアルト云フ事實ヨリ之ヲ演釋的ニ論證シテ居ル。今其演釋的議論ノ一班ヲ紹介スレバ次ノ如クデアル。

『假ニ農業ニ於イテモ生産力ノ増加ガ工業ニ於ケルト同一ナリト假定シ、其増加ノ割合ヲ二倍トス

(1) Cannan, Production and Distribution, p. 159.
(2) West, p. 25.

ルナラバ、農産物モ工業品モ凡テ二倍ニナル譯デアル。サレバ此場合ニ於イテ物ト物トノ交換比例ハ以前ト同ジ事ダトシテモ、各人ノ支配セル貨物ノ分量ハ正ニ從前ノ二倍ニ增加スルコトニ爲ル。而シテ若シ貨幣ガ以前ト同ジ分量ニ止ルモノトスレバ、凡テノ物價ハ以前ノ半分ニ下落スル筈デアル。從ツテ最初ノ中ハ資本ノ利潤モ勞働ノ賃錢モ少シモ殖エヌ筈デアルガ、只此ノ如ク物價ガ下落スレバ大ニ一般ノ貨物ノ輸出ヲ增加スルコトト爲リ、其結果地金ガ輸入サレテ貨幣ガ殖エルコトニ爲ルガ、サウナレバ資本ニ對スル利潤モ、勞働ニ對スル賃錢モ、其貨幣價格ヲバ騰貴セシムベキ筈デアル。此ノ如ク農業上ノ勞働ガ工業上ノ勞働ト等シク次第ニ其生産力ヲ增加スルトセバ、利潤ハ次第ニ騰貴スルコトニ爲ラナケレバ爲ラヌ筈デアル。併シ實際ニ於イテ利潤ノ現ニ次第次第ニ下落シツツアルヨリ考フレバ、ツマリ農業上ノ勞働ガ工業上ノ勞働ト同ジヤウニ其生産力ヲ增加スルモノト假定シタノガ間違デアル。」(1)

先ヅ一例ヲ擧グレバ此ノ如キ論法ヲ用ヒテ居ルノデアルガ、今其論證ノ仕方ハ別トシテ、兎モ角以上述ベシ所ニ依ツテ見レバ、うえすとノ謂フ所ノ土地産物遞減ノ原則ナルモノハ、産業發達ノ長キ期間ヲ通ジテノ歷史的事實ニ關スル經驗律デアツテ、卽チ社會ノ現實ノ狀態ニ關スル一ノ動的法則デアルノデアル。

扨テうえすとノ說キシ所ハ大體以上ノ如シトシテ、コレダケノ說明ヲシタうえすとハ如何ナル點マデ收益遞減ノ法則ノ發見者ト謂ハレ得ルカト云フニ、其ハ吾吾ガ如何ナル意味ニ收益遞減ノ法則ヲ解釋スルカト云フコトニ依ツテ決マル。仍

(1) p. 14.

ツテ試ニきやなんノ解釋ヲ見ルニ、氏ハ次ノ如ク述ベテ居ル。

『收益遞減ノ法則トハ、一國人口ノ增加又ハ一層嚴密ニ之ヲ言ハバ、一定面積ノ土地ニ加ヘラルル勞働ノ增加ハ、農的產業ノ一定ノ分量ニ對スル報酬ノ減少ヲ伴フノ傾向ヲ有ス、ト云フ命題ニ與ヘラレタ名デアル。』(1)

此ノ如ク此法則ヲ以テ歷史上ノ傾向律ヲ言表ハシタ一ノ動的法則ト解釋スルナラバ、嘗テきやなんガ『若シ吾人ニシテうえすとノ小冊子ヲ通讀センカ、今日マデ收益遞減ノ法則ノ論ゼラレ來リシ形式及ビ此法則ヲ言表ス爲ニ用ヒラルル用語ハ、普通ニ考ヘラレテ居ルヨリモ遙ニ多クヲバうえすとニ歸スベキモノナルヲ發見スルデ有ラウ』(2)ト云ツタ言葉ノ決シテ不當ニ非ザルヲ知ルニ足ル。乍併其後此法則ハ次第ニ靜的法則ノ性質ヲ有スルモノニ變更サレ、今日デハ殆ド之ヲ動的法則ニ理解シテ居ルモノハ無イ。ソコデ吾々ハ更ニ問題ヲ進メテ、抑々此法則ヲ一ノ靜的法則ト看做スニ至ツタ最初ノ學者ハ何人デアルカ、ト云フ疑問ヲ研究スルノ必要ガアル。

二、法則ノ發見(下)——まるさす

收益遞減ノ法則ヲ一ノ靜的法則ト看做スニ至リシ最初ノ學者ヲ詮索スルニ先

(1) Palgrave, Dictionary of Political Economy, vol. I, p. 585. a.
(2) Cannan, Production and Distribution, p. 160. The Economic Journal, vol. II, 1892, p. 66.

チ猶うえすとニ關聯シテ茲ニ一言ヲ費シ置クノ必要アルハ、動的法則トシテノ收益遞減ノ法則トまるさすノ人口論トノ關係デアル。蓋シ學者ニヨリテハ動的法則トシテノ此法則ハ初メテまるさすガ其人口論ニ於イテ唱ヘ出シタモノデアル、ト說イテ居ル者ガアル。而シテ若シ此說ヲ眞ナリトセンカ、人口論ノ初版（一七九八年出版）ハ勿論、再版（一八〇三年出版）三版（一八〇六年出版）四版（一八〇七年出版）等何レモ先キニ述ベタルうえすとノ著書ヨリ遙ニ先キニ出デタルモノナレバ、此法則ノ發見者タル功ハうえすとヨリモ之ヲまるさすニ歸スベキ筈ニ爲ル。是レ茲ニ一應まるさすノ所論ヲ吟味スルノ必要アリト爲ス所以デアル。

抑々食物增加ノ速度ハ人口增加ノ速度ニ及バザルモノナリト云フ命題ガまるさすノ人口論ニ缺グベカラザル前提タルコトハ、殆ド疑フ可ラザルコトデアル。例ヘバ氏自身ガ其人口論第三版ノ附錄ニ次ノ如ク述ベテ居ル。

『余ガ人口論ニ對シ上述ノ如キ非難ヲバ兎モ角一貫シテ之ヲ維持シヤウトスル人ガ有ルナラバ、其人ハ、余ガ人口論ノ冒頭ニ於イテ立言セント試ミタコト、卽チ人口ト食物トノ增加ハ其比例ヲ異ニスルト云フコトノ根本的ニ誤謬ナルコトヲ證明スルノ義務ガアル。何故ト云フニ此立言ニシテ若シ眞ナリト假定センカ、余ノ結論ハ避ク可ラザルガ爲デアル。』(1)

其外

(1) Principle of Population, 3rd ed., Appendix, p. 519. 6th. ed., 452. Ashley's ed., p. 111.

....the different ratios of increase on which my principal conclusions are founded....(2)

トカ、又ハ the argument, which depends entirely upon the differently increasing ratios of population and food....(3)

トカ云フヤウナ文句ヲ所々ニ使ツテ居ルノミナラズ、更ニ又

It has been said that I have written a quarto volume to prove that population increases in a geometrical ratio, and food in an arithmetic ratio; but this is not quite true. ..... The chief object of my work was to inquire what effects these laws, which I considered as established in the first six pages, had produced and were likely to produce on society; ....(4)

ト云フコトヲモ述ベテ居ルノデアル。サレバ食物增加ノ速度ガ人口增加ノ速度ニ及バヌト云フコトヲ以テ其人口論ノ前提ト爲セルモノナル事ハ殆ド疑ヲ容レヌ所デアルガ、然ラバ何故彼ハ食物增加ノ速度ヲ以テ爾ク緩漫ナルモノナリト見タリヤト云フニ、普通ニハ彼ガ收益遞減ノ法則ヲ認メテ居タ爲デアルト云フヤウニ漠然考ヘラレテ居ルシ、又現ニ爾カ論ジテ居ル學者モアル。例ヘバおつぺんはいまー(5)ぶどげ(6)はねー(7)等ハ卽チ其レデアル。

然ラバ是等ノ學者ガまるさすノ人口論ヲ以テ收益遞減ノ法則ヲ認メ居タリト爲ス根據ハ何處ニアルカト云フニ、其ハ次ノ如キ文句ガ人口論ノ中ニアル爲デアル。

When acre has been added to acre till all the fertile land is occupied, the yearly increase of food must depend

(2) 6th ed., Appendix, p. 451. Ashley's ed., p. 110.
(3) 6th ed. p. 253. Ward, Lock & Co .ed., p. 439.
(4) 6th ed. p. 453. n. Ashley's ed., pp. 112-113.
(5) Oppenheimer, Das Bevölkerungsgesetz des Th. R. Malthus, 1900, S. 18, 19.
(6) Budge, Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz, 1912, S. 16. 17.
(7) Haney, History of Economic Thought, 1911, pp. 199, 200.

upon the melioration of the land already in possession. This is a stream (dai 5 han no toki ni, kono "stream" to yumoji ga, hajimete "fund" ni kawatta), which, from the nature of all soils, instead of increasing, must be gradually diminishing. (1)

段々耕地ガ擴張サレテ豐饒ナ土地ガ凡テ占領サレテ仕舞フト、食料ノ年々ノ增加ハ既ニ利用サレ居ル土地ニ依ルノ外仕方ガナクナツテ來ル。然ルニ此流レハ(第五版ニ至リテ『流レ』ト云フ文字ハ『本源』ト云フ文字ニ改メラル)凡テノ土地ノ性質ヨリシテ、增加スル代リニ次第ニ減少スベキ筈ノモノデアル。

是等ノ文章ヲ輕卒ニ讀ムト、吾々ノ頭ノ中ニハ既ニ law of diminishing returns ガアルノデアルカラ、殊ニ gradually diminishing ナド云フ文句ニ出逢フト、直グニ收益遞減ノ法則ノコトガ書イテアルト云フヤウニ思込ンデ仕舞フノデアルガ、併シ是等ノ文章ニハ只總生產物ノコトガ述ベテアルダケデ、土地ニ投ズル所ノ資本及ビ勞働ノ分量ト之ニ依ツテ生ズル生產物ノ分量トノ關係、卽チ純生產物ノコトニハ、一言モ觸レテ居ナイノデアルデアル。

今一ツノ文句ハ次ノ如クデアル。

The improvement of the barren parts would be a work of time and labour; and it must be evident to those who have the slightest acquaintance with agricultural subjects, that in proportion as cultivation extended, the addition that could yearly be made to the former average produce, must be gradually diminishing. (2)

不毛ノ土地ノ改良ハ、時ト勞力ヲ要スル仕事デアル。而シテ苟クモ農事ニ關シ些少ノ智識ヲ有スル

(1) 2nd ed. p. 5. 3rd ed p. 8. 4th ed. p. 8. 5th ed. p. 9. 6th ed. p. 7. Ward, Lock&Co. ed. p. 4. Ashley's ed. p. 82.

(2) 2nd ed. p. 7, 3rd ed. p. 11, 4th ed. p. 11, 5th ed. p. 12, 6th ed. p. 9, Ward, Lock. & Co. ed. p. 6, Ashley's ed. p. 34.

者ハ、耕作ヲ擴張スルニ比例シテ、前年ノ平均產額ニ加ヘラルル所ノ年々ノ增加產額ハ、次第ニ且規則正ク減少スルモノナルコトヲ明カニ認ムルデ有ラウ。

此文章ノ中ニモ、前ト同ジヤウニ、只總產額ノコトガ述ベテアルダケデアル。耕地ヲ擴張スルニツレテ、年々ノ產額ハ面積ノ割合カラ云フト比較的ニ減少シテ來ルト云フダケノ事デアツテ、生產物ト其生產ニ要スル勞費トノ關係ハ少シモ述ベテナイノデアル。

尤モ前ニ揭ゲタ文章ニハ、從來ノ耕地ヲ集約的ニ耕作スルコトニ依リテ生ズル產額ノ增加ガ次第ニ減少スルモノナルコトガ述ベテアリ、後ニ揭ゲタ文章ニハ、耕地ノ擴張ニ本ク產額ノ增加ガ次第ニ減少スルモノナルコトガ述ベテアツテ、而シテ是等二個ノ考ハ相俟ツテ收益遞減ノ法則ヲ成立セシムルニ至ル根本ノ考デアルケレドモ、併シまるさすハ此ノ如キ考ヲ組ミ合セテ之ヲ收益遞減ノ法則ト云フ一個ノ法則ニ作リ上ゲルマデニハ到ラナカツタノデアル。收益遞減ノ法則ノ依ツテ成立スル根本ノ思想ヲ切レ切レニ發表シテ居タト云フコトト、此法則ソノモノヲ立言シタト云フコトトハ、論ズルマデモナク全ク別種ノ事柄デアル。故ニはねー(1)ハ之ヲ評シテ rather superficial and hypercritical ト爲セシニモ拘ラズ、余ハ依然トシテ

(1) Haney, Ibid, p. 200, foot-note.

『まるさすハ其人口論ノ初版ノ其處此處ニ多少此法則ノ暗示ヲシテ居ルト云ツテモ差支ナイカモ知レヌ。サウシテ第二版ニ於イテハ、確カニ此法則ノ依ツテ成立スル所ノ根本思想ヲハ、附隨的及ビ補助的ノ議論トシテ用ヒテ居ル』ト云フきゃなんノ說(2)ニ從フ者デアル。

然ラバりかーどーガ其原論ノ序文ニ於イテ、眞ノ地代說ヲ闡明シタル最初ノ學者トシテうえすとト共ニまるさすヲ擧ゲテ居ルノハ何故デアルカト云フニ、其ハまるさすガうえすとノ著書ト同ジ年ニ出シタ小冊子 An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated ノ中ニ收益遞減ノ法則ノコトヲ論ジテ居ルカラデアル。

但シ氏ガ此書中ニ論ジ居ル所ハうえすとノ所論ニ比シ決シテ優ツテ居ル所ハ無イ。勿論斯ク論斷スルニ就イテハ余ハ之ヲ論證スルノ責任ヲ有スレドモ、餘白乏シケレバ今ハ姑ク其仔細ヲ略スルトシテ、只其出版ノ時日ニ就イテ一言センニ、まるさすノ此小冊子ハうえすとノ其レト同ジ年ノ一八一五年ニ出版サレタモノデアツテ、且其出版サレタ日ガ一月十三日以後二月六日以前デアルコトハ、『りかーどー書簡集』(3)ヲ見テ分ル。卽チ此集ノ第二十二ニ收メラレタル書簡ハ一八一五年一

(2) Production and Distribution, p. 144.
(3) James Bonar, Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus 1810-1823. (1887.) pp. 56, 58.

月十三日ト日附ガシテアルガ、其冒頭ニ

My dear Sir,

I am pleased to learn that you are busy writing with a view to immediate publication.……

トアル。其カラ書簡集ノ第二十三ニ收メテアル書簡ハ、郵便局ノ消印ガ二月六日トナツテ居テ、且まるさす自身ガ一八一五年二月ト鉛筆デ記入シテ居ルト云フモノデアルガ、其冒頭ニハ

My dear Sir,

I have now read with great attention your essay on the rise and progress of Rent.……

ト云フ文字ガアル。其故まるさすノ著書ノ出版サレタ月日ハ略ボ想像ガ着クガ、うえすとノ著書ニ至ツテハ惜イ哉此ノ如キ材料ガ無イ。只りかーどーガ同ジ一八一五年ノ三月九日ニまるさすニ宛テタ書簡ヲ見ルト、其一節ニ次ノ如キ文句ガアル。

Since I have seen you I received a note from Mr. Edward West, who is the author writing under the title of a Fellow of University College; he speaks in favour of my opinions of course, because they are very similar to his own. I have read his book with attention, and I find that his views agree very much with my own. He is a barrister, a young man, and appears very fond of the study of political economy. Mr. Brougham has, I think he said, promised to introduce him to you.

此手紙ヲ見ルト、うえすとノ著書モ亦少クトモ一八一五年ノ三月九日以前ニ出

版サレテ居タト云フコトダケハ明カデアル。卽チまるさすノ著書ハ一月十三日乃至二月六日ノ間ニ出版サレタト云フコトガ分リ、うえすとノ著書ハ三月九日以前ニ出版サレタト云フコトガ分ツテ居ルダケデ、二者ノ何レガ先デアルカハ考定ニ苦ム次第デアル。然ルニ余ガ茲ニ姑クうえすとヲ以テ收益遞減ノ法則ヲ發見シタ第一人者ト爲シ置ク所以ハ、氏ノ著書ハまるさすト略ボ同ジ頃ニ出デ、而カモ其所論ハまるさすノ其レヨリモ遙ニ明確ナルコト、氏ノ著書ノ主タル目的ハ此法則ヲ明カニスルニ在ルノミナラズ（此事氏自ラ其著書ノ冒頭ニ之ヲ言フ）、氏ハ明カニ之ヲ以テ經濟學上重要ナル一原則ト爲セル點ニ於イテ（此事モ氏自ラ其著書ノ冒頭ニ之ヲ言フ）、最モ能ク此法則ノ價値ヲ認メ居タルコト、此法則ハ氏ノ言――occured to me some years ago――ニ依レバ之ヲ公ニスル數年前ヨリ考ヘ居タルモノノ如クナレバ、氏ノ著述ハ少クトモ氏ガまるさすノ地代論ヲ讀ミタル後ニ思ヒ付キタルモノニ非ザル可シト推定セラルルコト等ノ理由ニ本ク。

三、法則ノ改造（上）――せにをあ

以上述ベタルガ如ク、收益遞減ノ法則ハ最初一ノ動的法則トシテ解釋サレタモ

ノデアルガ、扨テ此法則ヲ此ノ如キ意味ニ解センカ、吾人ハ社會ノ前途ニ對シ到底悲觀說ヲ抱クヲ免レザルモノデアル。何故ト云フニ、人口ノ增加ハ農產物ノ需要ヲ增加スレドモ、其農產物ノ生產增加ハ、此法則ニ從ヘバ將來益々困難ト爲ルベキモノナルガ爲デアル。是レ英國ノ經濟學史ニ於イテ一時悲觀學派ナルモノヲ生ズルニ至ツタ所以デアツテ、まるさす、りかーどーヲ始メ、とれんす(1)せーむす、みる(2)まかろつく(3)更ニ進ンデハじよーん、すちつわーど、みる(4)けあんず(5)等ニ至ルマヲ、凡テ此法則ヲバ其發見者ト同ジク之ヲ動的法則トシテ解釋シタモノデアル。

學界ノ趨勢此ノ如キ間ニ在ツテ、早ク此動的法則ニ反對シ、更ニ之ヲ以テ一ノ靜的法則ニ改造シタ學者ガアル。なつさう、ありあむ、せにをあハ卽チ其人デアル。

氏ハ一八二八年をくすふぉーど大學ニ於イテ人口論ヲ論ジ、翌年之ヲ冊子ニ纏メテ公ニシテ居ル。ソウシテ其書ノ扉ニハ次ノ如ク題シテアル。

Two Lectures on Population, delivered before The University of Oxford in Easter Term, 1828. To which is added, A Correspondence between the Author and The Rev. T. R. Malthus.

(註)此書ノ出版ハはれーノ『經濟思想史』(6)ニ依レバ一八三一年トアリ、我法科大學所藏本モ亦一八三一年ノ出版ニ拘ル。然ルニきゃなん(7)ニハ二個所共ニ明カニ一八二九年ノ出版ト爲シアリ。注意周到、最モ信賴スルニ足ルきゃなんノコトナレバ、マサカ間違ハ無カルベシトハ思ヒツツモ、猶半

(1) Torrens, An Essay on the External Corn Trade. 1815.
(2) J. Mill, Elements of P. E. 1821. (3rd ed. p. 56.)
(3) M'Culloch, Principles of P. E. 1825. pp. 277, 278. (4th ed. pp. 494, 495.)
(4) J. S. Mill, Principles of P. E. 1848. Bk. 1, ch. XII. §1, §2, §3.
(5) Cairnes, Some Leading Principles of P. E. 1875. p. 119.
(6) Haney, p. 211.
(7) Cannan, Ibid, pp. 170, 419.

信半疑ノ間ニ在リシニ、最近ニ到着セシ同書ノ別本ヲ見レバ、明カニ一八二九年ノ出版ニナリ居リ、初メテ疑問ヲ氷釋シタコトデアル。

猶序ナレバ一言シ置カンニ、一八二九年版ト一八三一年版トハ內容及ビ植字全ク同一ナレドモ、只其出版者ヲ異ニシ、從ツテ扉ノミ纔ニ異リ居レリ。即チ一八二九年版ノ扉ニハ發行者ノ所ニ London: Saunders and Otley, Conduit Street. トアリテ、扉ノ裏ハ白紙ナレドモ、一八三一年版ノ扉ニハ London: John Murray, Albemarle Street. トアリテ、扉ノ裏ニハせにゐあノ著書四册ノ廣告ガ印刷シテアル。

氏ハ此書中ニ於イテ、人口增加ノ速度ト食物增加ノ速度トノ比較ニ關スルまかろっく、せーむす・みる乃至まるさすノ意見ヲ批評シ、若シ是等ノ人々ノ意見ガ正シケレバ、吾々人類ハ人口ノ增加ニ伴ヒ益々貧窮ニ陷ル可キ筈ナレドモ、之ヲ歷史上ノ事實ニ徵スルニ、凡テノ文明國ニ於イテハ之ト反對ノ現象ガ行ハレテ居ルカラシテ、食物ハ人口ヨリモ一層大ナル比例ヲ以テ增加スルノ自然的傾向ヲ有スルモノナリト云フコトヲ論ジテ居ル。(1) 併シ此著書ニ於イテハ、氏ハ只人口增加ノ速度ト食物增加ノ速度トヲ比較シタダケデアッテ、其レ以外ニハ收益遞減ノ法則ソノモノニ對シテ別ニ貢献シテ居ル所ハ無イ。

前掲ノ著書ヨリモ猶注意スベキモノハ、氏ガ一八三六年 Encyclopaedia Metropolitana ノ中ニ公ニセシ Political Economy デアル。此書ハ其後別刷サレ屢々版ヲ重ネシモノ

(1) pp. 46-49, 51-52.

ニテ、余ノ見ルヲ得タルハ一八五〇年ノ再版、一八五八年ノ四版、一八七二年ノ六版(此版本ハ同志社教授瀧本誠一君ヨリ借覽ス)ノ三種デアルガ、後ノ二者ハ植字ノ有樣全ク同一デアル。氏ハ此書ニ於イテ the general facts on which the science of Political Economy rests are comprised in a few general Propositions, the result of observation or consciousness (經濟學ノ依ツテ以テ立ツ所ノ一般的事實ハ觀察又ハ思索ノ結果ニ成ル所ノ三四ノ一般的命題ヨリ成リ立ツ)ト說キ、其一般的命題ナルモノヲ次ノ如ク列擧シテ居ル(1)

1. That every man desires to obtain additional Wealth with as little sacrifice as possible.

2. That the Population of the World, or, in other words, the number of persons inhabiting, it is limited only by moral or physical evil, or by fear of a deficiency of those articles of Wealth which the habits of the individuals of each class of its inhabitants lead them to require.

3. That the power of Labour, and of the other instruments which produce Wealth, may be indefinitely increased by using their products as the means of the further Production.

4. That agricultural skill remaining the same, additional Labour employed on the land Within a given district produces in general a less proportionate return, or, in the other words, that though, with every increase of the Labour bestowed, the aggregate return is increased, the increase of the return is not in proportion to the increase of the Labour.

此中茲ニ關係ノアルハ其第四デアツテ、之ヲ直譯スレバ次ノ如クデアル。

『農業上ノ熟錬ニシテ若シ一定シ居ルナラバ一定ノ區域内ノ土地ニ投セラルル增加分ノ勞働ハ、一

(1) 2nd, 4th, 6th, etc., p. 26.

般ニ比較的ニ少キ收穫ヲ生產スルモノデアル。換言スレバ、使用セラルル勞働ヲ增加スル每ニ、總體ノ收穫ハ增加スレドモ、其收穫ノ增加ハ勞働ノ增加ト比例ヲ保ツモノデハ無イ。』

此一文ヲ見ル時ハ、氏ハ先ヅ農業上ノ技術ヲ一定シ、且問題ヲ一定面積ノ土地ノ生產力ニ限定シテ居ルノデアツテ、卽チ明カニ收益遞減ノ法則ヲバ今日吾々ガ解スル如キ一ノ靜的法則ニ改造シテ居ルノデアル。思フニ從來ノ學者ガ動的法則トシテノ收益遞減ノ法則ノ存在ヲ認メシハ、元來靜的法則ニ說クガ如キ收益ノ遞減ヲバ其前提ト爲シタルガ爲ニ外ナラヌケレドモ、而カモ之ヲバ動的ノ觀察ト全ク切リ離シ、獨立セル一ノ靜的法則トシテ之ヲ認ムルニ至リタルハ、余ノ知レル限リニ於イテハ、此せにをあが最初ノ學者デアル。此點ニ於イテ、氏ハ此法則ノ歷史上最モ注意スベキ學者ノ一人デアルト云ハナケレバ爲ラヌ。

四、法則ノ改造(下)——ふをん・てゅーねん

最初動的法則タリシ收益遞減ノ法則ガ前段ニ述ベシ如ク一ノ靜的法則タルニ至リシコトハ、此法則ノ第一段ノ進化デアル。而シテ最初土地ノ生產力ニノミ關スルモノト看做サレシ此法則ガ、資本及ビ勞働ノ生產力ニ就イテモ同樣ノ適用アルモノト看做サルルニ至リシハ、其第二段ノ進化デアル。余ハ今此第二段ノ進化ニ就

イテ更ニ數言ヲ費シ以テ此稿ヲ了ル積リデアル。

蓋シ一定面積ノ土地ノ上ニ使用セラルル所ノ資本及ビ勞働ヲ增加スル時、之ニ依リテ生ズル生産物ノ增加ノ割合ガ資本及ビ勞働ノ增加ノ割合ヨリ小ナルニ至ルハ、其資本及ビ勞働ノ使用ガ或程度以上ニ達シタル場合以後ノコトデアツテ、其レ以前ニ於イテハ、資本及ビ勞働ノ增加ノ割合ヨリモ之ニヨリテ生ズル生産物ノ增加ノ割合ガ大ナルモノデアル。換言スレバ、一定面積ノ土地ノ上ニ使用セラルル資本及ビ勞働ノ分量ガ或程度ニ達スルマデハ收益ノ遞增ヲ見、或程度ヲ超エタル後ニ始メテ收益ノ遞減ヲ見ルニ至ルノデアル。此ノ如ク收益ノ遞減ノ前ニハ先ヅ收益ノ遞增ガアルノデアルガ、今此ノ收益ノ遞增ナルモノハ土地ノ集約的利用ニ依ツテ生ズルモノナルガ故ニ、之ヲ逆ニ言ヘバ、斯カル收益ノ遞增ノ行ハルル限リニ於イテハ、其ノ土地ノ利用ヲ粗放的ニスレバスルホド次第ニ收益ノ減少ヲ生ズベキ筈デアル。扨テ此ノ土地ノ利用ヲ次第ニ粗放的ニスルトハ、一定ノ土地ニ組合ハサルベキ資本及ビ勞働ノ分量ヲ次第ニ減少スルコトデアルガ、今立言ノ立場ヲ土地ヨリ資本及ビ勞働ノ側ニ移サンカ、コハ畢竟一定ノ資本及ビ勞働ニ組合ハサルベキ土地ノ分量ヲ次第ニ增加スルコトデアル。而シテ此場合ニ次第ニ收益ノ減

少ヲ見ルモノトセンカ、ソハ卽チ一定ノ資本及ビ勞働ノ上ニ收益遞減ノ法則ノ行ハレ居ルコトヲ語ルニ外ナラヌ。

之ヲ要スルニ、土地ニ關シテ收益遞減ノ行ハルル前ニ收益遞增ノ行ハルルモノナルコトヲ認ムル以上、資本又ハ勞働ニ關シテモ同ジヤウニ收益遞減ノ法則ノ行ハレ居ルコトヲ認メナケレバ爲ラヌノデアツテ、畢竟收益遞減ノ法則ハ啻ニ土地ニノミナラズ、資本ニモ又勞働ニモ等シク其適用ヲ見ルベキ筈ノモノデアル。然ルニ此ノ見易キ道理ガ永ク學者ニ依ツテ看過サレタノハ寧ロ不思議デアル。

扨テ收益遞減ノ法則ヲ以テ、啻ニ土地ニノミナラズ、資本及ビ勞働ニモ同樣ニ其適用アルモノナル事ヲ唱ヘ出シタル最初ノ學者ハ果シテ何人ナリヤト云フニ、余ハ嘗テ本誌第一卷第三號(1)ニ於イテかーヾーヲ擧ゲ、氏ガ一九〇三年 The Quarterly Journal of Economics ニ公ニシタル The Universal Law of Diminishing Returns ヲ以テ斯カル議論ノ公ニサレタル。最初ノモノナリト爲セシガ、コハ大ナル誤解ニシテ赤面ノ外ナキ次第デアル。同ジ米國ニ於イテモかーヾー以前ニくらーくガアル。氏ガ一八八八年十二月二十七日米國經濟協會ノ第三大會ニ於イテ爲セシ講演 The Possibility of a Scientific Law of Wages ガ卽チ其レデ、ソハ翌一八八九年三月ニ公ニサレシ Publications

(1)　一三三頁

of the American Economic Association, vol. IV, no. 1. ノ中ニ收メラレテアル。

併シ海ヲ超エテ歐洲大陸ニ渡ランカ、獨逸ニふれん・てゅーねんガ居ル。而シテ氏ハくらーくヨリモ遙ニ前ニ此事ヲ説明シテ居ルノデッテ、嘗テ余ガ此ノ有力ナル學者ふれん・てゅーねんヲ忘レテ居タコトハ誠ニ申譯ナキ次第デアル。

よはん・はいんりひ・ふれん・てゅーねんニハ有名ナル著書 Der isolirte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie ガアル。此書ノ Erster Theil ハ一八二六年ニ公ニサレタモノデ、此部分ニ關シテハ近頃法學士谷井類助氏ノ邦譯ヲ見ルニ至ッタガ、主トシテ茲ニ關係ノアルノハ其後ノ部分デアル。而シテ其出版年月ハ遙ニ後レテ居テ、卽チ Zweiter Theil ノ Erste Abtheilung ハ一八五〇年ニ出デ、其 Zweite Abtheilung 及ビ Dritter Theil ハ一八六二年ニ至リ始メテ公ニサレタモノニアル。

扨テ是等ノ著述ヲ見ルト、氏ハ驚クベキコトヲ述ベテ居ル。例ヘバ一八五〇年ニ公ニサレタ Zweiter Theil ノ Erste Abtheilung ヲ見ルト、其中ニハ

…jedes in ein r Unternehmung oder einem Gewerbe neu angelegte, hinzukommende Kapital geringere Renten trägt, als das früher angelegte. (1)

トカ、又ハ

…so vermehrt, wie wir oben gesehen haben, das neu hinzukommende Kapital das Arbeitsprodukt des Men-

(1) S. 99.

shen in geringern Grade als das zuvor angelegte Kapital. (2)

ト云フヤウナコトガ述ベテアツテ、卽チ氏ハ疑ヒモナク、收益遞減ノ法則ヲ以テ土地、資本、勞働ノ凡テニ貫通スルノ法則ト認メテ居ルノデアル。

氏ノ議論ヲ詳述スルコトハ、與ヘラレタル紙面既ニ盡キタルガ故ニ、之ヲ他日ニ讓ルノ外ハ無イガ、要スルニ、今ヨリ殆ド七十年前ニ公ニサレタル氏ノ議論ハ、今日學界ニ於イテ少カラザル勢力ヲ有スルくらーく一派ノ限界生産力說ノ先驅ヲ爲スモノデアツテ、此意味ニ於イテ氏モ亦收益遞減ノ法則ノ歷史上特筆スベキ學者ノ一人ナリト信ズル。

(2) S. 100.